

[課題演習概要]

高校歴史における真正な学びをもたらす授業づくり —意思決定型ワークシートの開発と改善を通して—

大 坪 冬 希

Fuyuki OOTSUBO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
中等教科教育高度実践力プログラム

(2023 年 1 月 10 日受理)

キーワード：真正な学び，高校歴史，授業づくり，意思決定型ワークシート

1 研究の目的

渡邊（2017）の指摘の通り，高校歴史の授業は知識量に対する授業数の不足と受験の存在から，知識詰め込み型の授業にならざるを得ない現状があるため，知識を効率よく教える授業が求められる。しかし，OECD の education2030 の教育目標において，自分の考えをもち，他者との考えの共通点や違いを見出し，受け止め，考えの違いから新たな価値を創造することが求められている。これは，既存の評価や慣習に依存するだけでは安心して生きていく保障がない予測困難な現代において重要なことである。そのため，学校教育において，生徒が自分の考えをもつことのできる授業の在り方が求められる。それは，生徒が学習内容と真剣に向き合い，自分の考えを構築できる授業であると考え。したがって，自分の考えを構築できる，生徒自身に学びをもたらすような授業の在り方について追究することには意義がある。

そこで，生徒が自分の考えを認識できるように生徒にとって真正な学びをもたらす高校歴史の授業の在り方について追究することを目的とする。

2 研究の計画

M1 前期	歴史を学ぶ意義の研究
M1 後期	真正な学びのプロセスの研究
M2 前期	真正な学びをもたらす授業づくりの具体化の研究
M2 後期	漸層的な問いによる意思決定型ワークシートを活用する授業の研究

3 研究の内容

(1) 真正な学び

まず，生徒が真正な学びをするとは，どういうことかを考察する。佐藤（1994）は「真正」が成立する条件の一つに，『『自分探し』の欲求を基盤として』と挙げている。ここから，生徒自身がどう生きていくかを選択できる状態になることが，真正な学びをすることだと考える。そこで，生徒が真正な学びをするプロセスについて図1のように表した。①生徒が未知である自分の外界にある知識を認識して，その知識の獲得に向かう。その知識を理解した後，②得た知識を自分と照らし合わせ，自分と向き合い，生き方について考える。③その結果として，自分に対する視野が広がり，自分自身の認識が深まる。このようにして，生徒が自分の生き方を選択できる状態になると考える。

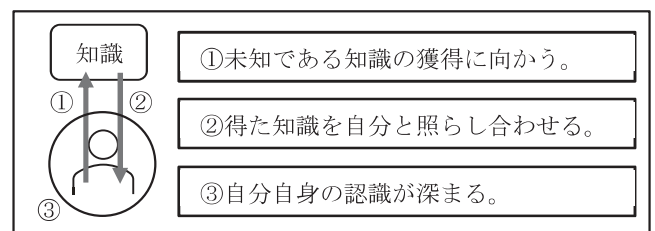


図1 生徒が真正な学びをするプロセス

また，高校地歴科の授業の目標は，高等学校学習指導要領(平成 30 年度告示)解説によると「社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力の育成」としている。そのため，真正な学びをもたらす歴史の授業であれば，生徒が「社会の形成者としての自分」を踏まえた自分の生き方を選択することができる。ここから，真正な学びをも

たらず高校歴史の授業の在り方として、大きく 3 つの段階があると考えます。1 つ目は、生徒が自分にとって未知である歴史的事象があることを認識し、その知識の獲得に向かう段階である。2 つ目は、その歴史的事象自体の理解をする段階である。3 つ目は歴史的事象の理解を踏まえて自分と照らし合わせ、自分自身の認識を深める段階である。この 3 つの段階を通して生徒が社会の形成者としての自分を踏まえ、自分の生き方を選択するための前提をつくることができると考える。

(2) 授業実践

○研究対象／時期

県立高等学校 第 3 学年 1 組（実践授業出席生徒数 19 名）／2022 年 6 月

○授業内容

単元	日本史 A 鎌倉時代
学習者	県立高等学校 第 3 学年 1 組
主眼	鎌倉時代の概観と、鎌倉幕府の御恩と奉公の主従関係のしくみを理解できる。
授業展開	①めあてを確認する ②重要語句の確認をする ③教師の解説を聞く ④意見を表出する ⑤振り返りをする

この授業では、生徒が教科書の内容を理解しつつ、自分事として歴史的事象について考えることのできる授業を目指した。これを実現するために 2 つのワークシートを用意した。教科書の重要語句を確認することを目的としたものと、生徒自身の考えを表出することを目的としたものである。1 つ目のワークシートは鎌倉時代の概観を押さえるためのもので、教科書の文章のうち重要語句のみを空欄としていた。2 つ目のワークシートは鎌倉幕府のしくみについて考えさせるもので、問いに対し自分の意見を表出する欄を設けた。具体的には「あなたがこの時代の御家人だった場合、鎌倉幕府に対して御家人として奉公しますか？」という問いを示した。今回の授業では、意見を交流する時間をとることができなかったが、生徒全員が意見を選択できており、19 名中 16 名は自分が選択した意見の理由まで記述できていた。

○授業考察（成果と課題）

今回の授業における成果は、ほとんどの生徒が意見を表出できた点である。これは「あなたが」という追体験的な問いの設定と二者択一で選択して考えを表出できるといった仕組みが効果的であったといえる。また課題は、生徒の考えを深めることができなかった点である。表出した意見の交流ができなかったため、当時の人々の思いや考え

について様々な視点から考える時間がなかった。この要因は、重要語句の確認の段階に時間を多く使ってしまったことである。それゆえに、教科書の重要語句を押さえて当時の社会の流れを踏まえつつ、当時の人々の思いや考えを認識できる時間配分を考える必要があるとわかった。

(3) 漸層的な問い

ここで、歴史の授業において生徒が当時の人々の思いや考えを理解するために、漸層的な問いの提示を提案する。これは、異なる条件に応じて同じ問いを繰り返す方法である。例えば、鎌倉時代において①源平の争乱期②承久の乱期③蒙古襲来期といった社会情勢の条件で、「あなたがこの時代の御家人だった場合、鎌倉幕府に対して御家人として奉公しますか？」という問いのみを考えることである。これにより、歴史の流れを踏まえながら当時の人々の価値観について考えることができる。その結果、教科書の内容を理解する社会認識と、当時の人々の価値観を考える人間認識をもち現在や未来の社会の在り方や人間としての生き方を考える真正な学びにもつながると考えた。

4 成果と課題（成果（○）課題（●））

○生徒が真正な学びをするプロセスを示し、高校歴史における真正な学びをもたらす授業についての考察ができた。

○意思決定型ワークシートで表出された考えは、生徒が自分自身を認識できるツールとなるため、現在や未来の社会の在り方や人間としての生き方を考える手がかりとなる。

●生徒が自分の考えを深めることができるように他者との交流の時間や漸層的な問いの提示のある授業をする必要がある。

●知識を押さえる段階と考えを表出する段階を両立できる時間配分を考えて授業を構成し、生徒が表出した考えを通して、自身の価値観を認識させるための時間を設ける必要がある。

主な引用・参考文献

- 文部科学省 2017 高等学校学習指導要領（H30 年度告示）解説地理歴史編 東洋館出版社
 佐藤学 1994 教室という政治空間-権力関係の編み直しへ 世織書房、教育学年報（3）、3-30
 渡邊明彦 2017 高校日本史における「歴史的思考力」育成の課題—静岡県東部の「授業時数」を事例に— 愛知教育大学学術情報リポジトリ、教科開発学論集、5、135-145